九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

唐末五代における『白氏文集』の伝承 : 詩僧斉己の活動を中心に

陳, 翀
九州大学大学院人文科学研究院専門研究員

https://doi.org/10.15017/13193

出版情報：中国文学論集. 37, pp.16-30, 2008-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

唐末五代における『白氏文集』の伝承

――詩僧齊己の活動を中心に――

陳　狆

一　東林寺本『白氏文集』の行方

中国現存の白氏文集の各刊本伝承の経緯を考える場合、今日の研究者の殆どは、北宋の宋敏求（一〇一九～一〇七九）が『春明退朝録』に書き綴った次の一文から論を始めている。[1]

唐白文公、自勒文集、成五十卷、後集二十卷、皆寫本。寄藏廬山東林寺、又藏龍門香山寺。高駢鎮淮南、寄語江西廉使、取東林集而有之。香山集、經亂亦不復存。其後履道里宅爲普明僧院。後唐明宗子秦王從榮、又寫本寘院之經藏。今本是也。後人亦補東林寺所藏、皆篇目次第非眞、與今呉蜀模版無異。

唐の白文公、自ら文集を勒して、五十巻と成し、後集もまた二十巻、皆写本なり。廬山の東林寺に寄蔵し、又龍門の香山寺に蔵す。高駢　淮南に鎮せるとき、江西の廉使に寄語して、東林の集を取りて之を有す。香山の集も、乱を経て、亦た復（ふたた）びは存せず。其の後　履道里の宅は普明僧院と為る。後唐の明宗の子の秦王從栄、又写本を院の経蔵に寘（お）く。今本是れなり。後人亦た東林寺の蔵する所を補ふも、皆篇目の次第は真に非ず、今の呉・蜀の模版と異なる無し。

また、宋敏求と同時期の文人にして廬山の故事を熟知する陳舜兪（？～一〇七五）は、『廬山記』（内閣文庫所蔵本）巻一「叙山北第二」に、宋敏求の記事と酷似する次のような記述を書き残している。

昔公之遊東林也、覩經藏中有遠公諸文士倡（ママ）和集。時諸長老亦請公文集同藏之。至大和九年爲太子賓客、始以文

集六十卷歸之。會昌中、致仕、復送後集十卷及香山居士之像。廣明中、與遠公『匡山集』並爲淮南高駢所取。呉太和六年、徳化王澈常抄謄以補其闕。

昔　公［白居易］の東林に遊ぶや、経蔵中に遠公［慧遠］諸文士の唱和集有るを覩たり。時に諸長老亦た公の文集を請ひて同じく之を蔵せんとす。大和九年　太子賓客と為るに至りて、始めて文集六十巻を以て之れに帰す。会昌中、致仕して、復た後集十巻及び香山居士の像を送る。広明中、遠公『匡山集』と並びに淮南の高駢の取る所と為る。呉の太和六年、徳化王の澈　常て抄謄して其の闕を補ふ。

両記事を整理すると、以下のようになる。

①広明年間（八八〇～八八一）、淮南節度使高駢（八二一～八八七）が、江西観察使に命じて廬山から東林寺本『白氏文集』を奪取した。

②後唐の秦王李従栄（?～九三四）が、かつての白居易履道里宅である普明禅院に、今本（宋刊本）と同じ『白氏文集』の写本を奉納した。

③呉の太和六年（九三四）、徳化王楊澈（生卒不明）が改めて東林寺に『白氏文集』写本を奉納。該本も今本と相違なし。

もしこれらの記述が伝える内容が事実であるとすれば、辛うじて会昌の法難を乗り越えた東林寺本『白氏文集』は、実は早くも高駢に奪取されて行方不明となり、宋刊本の祖本となったものは、楊澈抄本と李従栄抄本の何れかであったことになる。だが、改めて両文を仔細に読み直してみると、次のような幾つかの疑問点が浮上してくる。

宋敏求の記述によれば、楊澈抄本と李従栄抄本は何れものちの宋刊本と一致するため、同一系統の抄本であると判断できる。しかしながら、この二人が何処からその抄本を手に入れたのか、また、二つの抄本が実際に東林寺本とどのような関連があるのか、史料に空白がある。『新五代史』秦王李従栄本伝によれば、李従栄は長興元年（九三〇）に河南尹を授けられ、長興四年（九三四）十一月に王位簒奪のクーデターで失敗した末、弟の李従益に殺された。[2] よって、彼が普明禅院（旧白居易履道里宅）に『白氏文集』の写本を奉納したのは、長興元年から四年までの四年間に限定される。奇しくもこれは、楊澈が東林寺に新たな『白氏文集』の抄本を奉納した時期とほぼ重なる。

果たしてこれは単なる偶然であろうか。しかも、宋敏求の記事には白居易本人の記述と齟齬する箇所が存在する。白居易本人の記述によれば、彼が香山寺に奉納したのは大集の『白氏文集』ではなく、洛陽の詩文を集めた『白氏洛中集』である。これは宋敏求の誤りであるに違いない。だとすれば、彼の東林寺本が高駢により奪取されたという言説は、果たしてそのまま信用してよいのだろうか。

かかる問題は、未だ十分に解明されないまま放置されてきた。本稿は、これらの問題を取り上げ、晩唐五代の有名な詩僧斉己をはじめとする廬山僧侶の活動に焦点を合わせ、現在懸案となっている唐末五代期における『白氏文集』の流布の経緯を明らかにしていきたい。

二　岑仲勉「高駢奪取説」の考証に対する再検証

さて、宋敏求が記した「高駢奪取説」は、実は、岑仲勉の考証を経て定説化されたものである。岑氏は、『全唐詩』中に見える晩唐の詩僧斉己（八六四～九四三）の「賀行軍太傅得白氏東林集」詩（『全唐詩』巻八四四・四部叢刊本『白蓮集』巻七）を提示して、これによって宋敏求の記事が立証できると主張した。[3] なお、岑氏が引用した斉己詩の本文は次の通りである。[4]

樂天歌詠有遺編　留在東林伴白蓮
百尺典墳隨喪亂　一家風雅獨完全
常聞荊渚通候論　果遂呉都使者傳
仰賀斯文歸朗監　永資聲政入薫弦

楽天の歌詠　遺編有り、留めて東林に在りて　白蓮に伴ふ。
百尺の典墳　喪乱に随ふも、一家の風雅　独り完全たり。
常て聞く　荊渚通候の論、果たして遂に　呉都使者に伝ふ。
仰ぎて賀す　斯文　朗監に帰し、永に声政の薫弦に入るに資せんことを。

斉己については、唐末五代に活躍した高名な詩僧であるということは知られているものの、その具体的な事跡や文学活動をめぐる論考は皆無に等しい。また年譜類も存在しない。実に謎の多い人物である。[5] しかし、今日に伝わる資料を博捜すると、『十国春秋』巻一百三、『宋高僧伝』巻三十及び『唐詩紀事』巻七十五に、彼の本伝が僅かに記されていることがわかる。しかし、何れも簡略でかつ齟齬が多いために、生卒年及び具体的な活動時期について

は依然として不明瞭である。幸い彼の詩文集である『白蓮集』が四部叢刊に収められており、先行研究を参照しながら、[6]『白蓮集』から得た新たな資料を加え、試みに斉己の略年譜を作成した（上図）。

さて、上記の斉己の詩によって、まず東林寺から『白氏文集』が流出したこと自体は確認できる。これを踏まえて、岑仲勉氏は斉己詩と宋敏求の記事とをつきあわせ、斉己が詩を献じた相手はまさしく高駢であったと断定する。岑仲勉氏は概ね次のように論を展開している。

①「行軍太傅」に対する考証：「行軍太傅」という官職が実在しないため、その「傅」字は江西団練使の鍾傳の「傳」字の誤記ではないかと推測する。だとすれば、宋敏求記事の「寄語江西廉使」と合致する。

②「呉都使者」に対する考証：高駢を指す。高駢は、乾符六年（八七九）から光啓三年（八八七）の間に淮南節度使を務めていた。彼は文学を愛好しており、東林寺本『白氏文集』の獲得に乗り出したとしても不思議ではない。

③流出時期に対する考証：高駢が東林寺本『白氏文集』を奪取したのは、淮南節度使を務める中和年間（八八一～八八五）のことであると推算する。これは、斉己の活動時期と符合する。

ところで、当該論文には言及されないものの、岑氏は実は別

【斉己略年譜】

咸通五年（八六四）	益陽の農民胡氏の子として生まれる。本名は胡得生。斉己「与崔校書静話言懐」詩に、「同年生在咸通里」と見える。
咸通十一年（八六六）～～～

の論考において、斉己の生年を会昌四年（八四四）前後としている。[7] これによって、岑氏がこの詩を作った頃の斉己はおおよそ三十五歳前後であったと想定していたことがわかる。この考証が岑氏の「高駢奪取説」をめぐる一連の論考の基礎となるのである。しかし、曹汛氏の指摘によれば、岑仲勉氏は、斉己の年齢を実は二十年も多く推算していた。[8] 今曹氏の考証に従い、改めて計算してみると、高駢が淮南節度使を拝命した時、斉己はまだ十五歳前後の少年となる。岑氏が論じるように、彼が高駢との間に親密な唱和関係を有していたとするのは殆ど不可能であろう。

ここまでの考証によって、岑仲勉氏が「高駢奪取説」について決定的な誤りを犯していたことが明らかになる。だとすれば、東林寺本『白氏文集』を奪取したのは、高駢ではなく、それよりも時代が下がる、斉己と同時代の人物でなければならない。

三　斉己が東林寺本を持ち出した真意

さて、改めて斉己の「賀行軍太傅得白氏東林集」詩を読んでみると、第三聯の「常聞荊渚通候論、果遂呉都使者傳」から、当時荊南節度使を務める高季興（?～九二八）の存在が浮上してくる。高季興は、後梁から後唐にわたって長期間荊南を牛耳った権力者である。その本伝は、『旧五代史』巻一百三十三及び『新五代史』巻六十九に見える。両伝記を踏まえて彼の事績を簡潔に纏めると、次のようになる。

高季興、本名は季昌、字は貽孫。初め後梁太祖の養子となり、天復二年（九〇三）軍功を立て宋州刺史となる。まもなく潁州防禦使に昇任。天佑三年（九〇六）荊南節度観察留後。翌年の開平元年に**荊南節度使**に昇任。更に翌年、**中書門下平章事**（または検校太師守中書令と称す）を兼任。貞明年間、**渤海王**に昇格。龍徳元年、後梁が滅亡、後唐に降伏して洛陽の荘宗に拝謁。同光三年（九二五）**南平王**。天成初年、反乱のために官職を剥奪されたが、引き続き荊南を支配。天成三年卒、年は七十一歳。子従晦が継位、明宗に謝罪して帰順、季興には諡名「武信」が贈られた。

実はこの高季興こそが、前掲した斉己詩の受取人であると思しい。まず詩に言及された官職名と右の高季興の経歴とを比べてみる。

（A）詩題の「行軍太傅」であるが、「行軍」とは、軍事かつ政治権力を握る地方節度使に対する通称である。例えば、杜甫の「徐少尹見過」詩に、「晩景孤村僻、行軍數騎來」（『杜詩詳注』巻十）とある。ここは荊南節度使の雅称としてみるべきであろう。「太傅」は、元来、周の三公の一つで、皇帝を補佐する最高位の官職であるが、唐代には設置されていない。ここは高季興が中書門下平章事を兼任したことを示すと解釈できる。

（B）尾聯の「朗監」も高季興を讃えるものである。これは、『周礼』天官冢宰の「乃施典於邦國、而建其牧、立其監。（鄭玄注）監、謂公侯伯子男、各監一國」を出典とする言葉であり、ここでは南平王たる高季興の敬称と考えられる。

呉都は五代時期における揚州の別名で、当時の呉の都である。呉都使者は、呉王の使者を指すと考えられる。五代十国の勢力図を確認してみると、実は江州は当時の呉王楊氏一族の支配下にあり、高季興の勢力範囲からは逸脱している。「常聞荊渚通候論、果遂呉都使者傳」とは、「荊南節度使のあなたが、いつもこれに論及することを聞き、ようやく呉都の使者に命令して持参させた」と言うことであろう。これによって、荊南節度使の高季興が、呉王を通じて東林寺本『白氏文集』を手に入れたという新たな事実が判明するのである。

前掲の斉己略年譜によれば、斉己がはじめて高季興陣営に加わったのは、龍徳元年（九二一）となる。ただしこの年は、高季興は洛陽に赴き後唐の荘宗に謁見していたため不在であった。そして天成初年（九二五）、高季興は後唐に対する反乱を疑われ、与えられた官職を全て剥奪された。これを踏まえるならば、斉己詩の制作年は、概ね龍徳二年（九二二）から天成初年の三年間に限定できる。ちなみに、前述した陳舜兪の記事によれば、『白氏文集』と同時に廬山から持ち出されたものに、東林寺の開祖慧遠の『匡山集』もあったことがわかる。

ではなぜ、一武人たる高季興が、敵対する呉王に頼んでまで、東林寺の『匡山集』と『白氏文集』を獲得する必要があったのだろうか。前掲の斉己詩を見ると、この高季興によって東林寺の重宝である両文集が奪取されたことに対して、東林寺の僧侶でもある斉己は喜んでいるようにも看て取れる。これは、一体どういうことであろうか。

先にも述べたように、斉己は、その高い知名度に反して、従来殆ど専門的な研究がなされていない謎の人物である。だが『白蓮集』を繙くと、彼が如何に五代の文壇を牽引していたかが容易に看取できる。荊南藩鎮に限らず、斉己は多くの藩鎮幕僚と密接な関係を持っていたようであり、その中には、荊南節度副使孫光憲のように、彼を師として仰ぎ見る人も少なくなかった。前掲の斉己伝によれば、斉己が常に「政治不問」という態度を堅持し、しかもよく詩を書いて高季興の叛意を押し止めていたことがわかる。[9] しかし高氏一族は、二十年にもわたって彼を手厚く待遇した。このことから、斉己の存在は荊南政権にとって特別な意義を有していたことがわかる。[10]

斉己は、つねに廬岳僧と自称して廬山への強い思いを抱きつつ、東林寺への帰還を切に望んでいた。あるいは、高季興は斉己を慰めるために『匡山集』と『白氏文集』の獲得に乗り出したのであろうか。しかし、このような暴挙は斉己にとっては必ずしも好ましいことではない。当の二つの文集が東林寺にとって如何に重要であるかは、東林寺の一員であることを自負する斉己であれば、誰よりもよく理解していたはずである。もし本当に彼が自己満足のために高季興の武力によって『匡山集』と『白氏文集』を占有したのであれば、彼は二度と東林寺に足を踏み入れることができなかったであろう。だが、『白蓮集』に収録される詩文からみると、彼は終始廬山僧団と緊密な連携を保っていることが確認できる。しかも、当時の東林寺の大僧正である匡白とも深い親交があったのである。[11]

だとすれば、高季興が東林寺から両文集を持ち出したのは、きっと他に何らかの深刻な理由があったと考えるべきだろう。実は江州は軍事要塞であったため、廬山も連年の戦火に巻き込まれていたのである。この危機的な状況について、斉己は「寄廬岳僧」詩において、「莫問江邊舊居寺、火燒兵刼斷秋鐘（江辺の旧居寺を問ふこと莫かれ、火焼兵劫　秋鐘断ゆ）」とあり、[12] これによって、当時、東林寺が再三の戦乱に巻き込まれ、既に廃滅寸前であったことが推測できる。これを踏まえれば、斉己が主君高季興に依頼して東林寺の重宝である慧遠『匡山集』と白居易『白氏文集』を持ち出したのは、より安全な場所に疎開させ、両文集を保管しようという思いがあったためと考えられるのである。実は、高季興は決して武力によって両文集を奪取したのではない。彼はあくまでも一協力者に過ぎず、その計画を立てたのは、斉己及び僧正匡白を中心とする東林寺の長老たちであった。これについては後節に改めて論じたい。

なお、斉己の「賀行軍太傅得白氏東林集」詩に明言こそされていないが、『白氏文集』が最終的に彼の手に渡ったことが、『白蓮集』巻六に収録される「謝西川可準上人遠寄詩集」詩の「堪随樂天集、共伴白芙蕖」の一聯に看て取れる。[13]「楽天集」とは、『白氏文集』をいう。「白芙蕖」は白蓮の別名で、斉己が東林寺に因んでよく使用した自称である。この詩によって、斉己が『白氏文集』を自らの生涯の至友として大切に保管していたことが窺われるのである。

四　李従栄抄本と楊澈抄本との接点

しかしながら、いくら東林寺が危機的な状況であったとは言え、寺の重宝である『白氏文集』が個人によって長期間占有されることは、決して許されるべきことではないであろう。実は、斉己が自分のところに『白氏文集』を留めることができたのは、彼が白居易が生前に奉納した寺院本の数に合わせて新たに二つの転写本、つまり、普明禅院の李従栄抄本と東林寺の楊澈抄本とを作らせたからではないかと考えられる。彼は新たに転写・校訂した本（楊澈本）を東林寺に奉納したのであろう。確かに、現時点で斉己と長興年間に突如出現したこの二つの抄本との直接的な関係を証明する確固たる資料はまだ見つかっていない。しかし、長興年間における斉己の動向は、彼と両抄本との緊密な関連を示唆している。

まず、斉己と後唐の秦王李従栄との関係から考察しよう。李従栄は後唐明宗の第二子だが、皇太子の従璟が早世したため、事実上の皇位継承者として政治と軍事の支配権を手に握っていた。新旧五代史の李従栄伝は、彼が文学を好み、よく高名な文人を王府に招待したことを記している。[14]恐らく彼は、秦王府推官の高輩を通して斉己と知り合ったのであろう。高輩が斉己と密接な関係にあることは、『白蓮集』に見える次の詩題から窺える。

※寄懐闕下高輩先輩巻（巻三）※謝高輩先輩寄新唱和集（巻四）※寄謝高先輩見寄二首（巻四）
※寄酬高輩推官（巻五）※謝秦府推官寄丹台集（巻七）※酬秦府推官高輩（巻七）※叙懐寄高推官（巻七）

「謝高輩先輩寄新唱和集」詩から、秦王李従栄と高輩との唱和集が、斉己に送られていたことがわかる。[15]また、

「謝秦府推官寄丹台集」詩によれば、秦王が自ら序文を綴った詩集『丹台集』が、斉己にも送られていたことがわかる。[16] これらの詩からは、斉己と秦王府との強い繋がりが窺われる。

更に、斉己の伝記によると、長興三年（九三二）、斉己は秦王の招待を承けて洛陽に入り、中秋の宴会に参加していた。[17] 奇しくもほぼ同じ時期、李従栄が白居易旧居である普明禅院に『白氏文集』を奉納した。従来この李従栄抄本は、江淮地域の民間写本によって再編した重抄本であると見なされてきた。[18] しかし、白居易の生前においても七十巻本『白氏文集』の入手はそもそも困難であり、[19] まして連年の戦火に見舞われた五代という動乱の時代を考えれば、実際に李従栄が奉納した抄本は、斉己が入手した東林寺本を底本とする転写本である可能性が極めて高い。だとすれば、李従栄抄本と楊澈抄本が宋刊本と同系統であることに対して説明ができるのである。

また、東林寺をはじめとする廬山僧団は、徳化王の楊澈と密接な関係を保持していたことが窺える。ここで、匡白の「江州徳化王東林寺白氏文集記」（『全唐文』巻九一九）の後半部分、楊澈が東林寺に『白氏文集』を奉納するに至る経緯を記した記述を検討してみよう。

洎唐之季世、兵火四起。向來之美、殆爲煨燼、則固知東林者、其已墜焉。有吳之天下也、武以定亂、文以延英。……德化王令大王處青宮日、……常於白集、是所留情。俄膺天命、秉旄鉞出撫江城。……王爲理清淨、視事之暇、閑採圖經、蹶然而悟。且曰、白傅嘗謫爲是邦典午。及訪之遺跡、又洗然。憶東林寺等有其集焉。又詢諸老僧、咸曰、執事者不勤、翦無遺矣。……時太和六年歳次甲午八月己巳朔十二日庚辰、管内僧正講論大德賜紫沙匡白。

唐の季世に洎び、兵火四もに起こる。向来の美、殆ど煨燼と為れば、則ち固より東林を知る者、其れ已に墜ちたりとす。有呉の天下となり、武もて以て乱を定め、文もて以て英を延ぶ。……徳化王　大王を青宮に処らしむる日、……常に白集『白氏文集』に於て、是に情を留むる所とす。俄かに天命を膺け、旄鉞を秉りて出でて江城を撫す。……王　理を為すこと清浄、事を視るの暇、閑に図経を採り、蹶然として悟る。且つ曰く、「白傅　嘗て謫せられて是邦の典午と為る」と。之を遺跡に訪ぬれば、又　洗然たり。憶て東林寺等に其の集を有せり。又　諸老僧に詢ぬれば、咸曰く、「事を執る者　勤ならず、翦りて遺す無し」と。……時

に太和六年歳次甲午八月己巳の朔十二日庚辰、管内僧正・講論大徳・賜紫沙匡白。

だが、これらの記述は、以下のように現存する文献資料と明らかに齟齬している。

（**A**）匡白の記事には、東林寺所蔵の『白氏文集』は、唐末の乱において既に紛失し、若い僧侶が昔東林寺に『白氏文集』が保存されていたこと自体知らなかったということが記されている。これは明らかな虚説である。

（**B**）記事には呉の太和六年、時の江州刺史、徳化王の楊澈がはじめて廬山を訪ね、そこで東林寺本『白氏文集』が無くなったことを聞き、自分が王子の時代に転写した文集を喜んで奉納したということが記されているが、これも明らかに歴史事実と齟齬する。

徳化王楊澈の事績について、『十国春秋』巻四には、「徳化王澈、太祖第六子也。武義元年封鄱陽郡公。睿帝即皇帝位、封平原王、己又遷封徳化、不知所終。（徳化王［楊］澈、太祖の第六子なり。武義元年［九一九］鄱陽郡公に封ぜらる。睿帝の皇帝位に即くや、平原王に封ぜられ、己ちに又徳化に遷封せらる、終はる所を知らず）」という記載しか残っていないが、彼は長年にわたって江州を牛耳った権力者であった。しかも、彼は早くに東林寺と深い関係を築き上げていたことが、陳舜兪『廬山記』巻五「古碑目篇第七」に記される碑目からも窺える。

廬山東林寺大師堂記　大和三年、奉化軍節度江州觀察處置等使特進檢校太尉兼侍中使持節江州諸軍事守江州刺史上柱國徳化王食邑三千戸楊澈、節度推官通判軍府公事朝議郎檢校尚書禮部員外郎兼侍御史雲騎尉賜紫金魚袋元皓、節度巡官將仕郎試大理評事掌奏賜緋魚袋倪匡明書并篆額。

このように、楊澈が武義元年（九一九）に鄱陽郡公に任命されてから、江州の軍事や政治、経済に力を持っていたことを考えると、彼は、前述の斉己「賀行軍太傅得白氏東林集」詩に言及される東林寺『白氏文集』を護送する「呉都使者」を派遣した張本人であり、まさしく宋敏求の記事が言及した「江西廉使」である可能性が高い。

では如何なる理由があって、匡白は後世まで残る碑文において敢えて事実ではないことを書き綴ったのか。前掲の資料と合わせてみると、次のように推測できる。つまり、何らかの理由があって、大中年間における東林寺再建の際に、慧遠の『匡山集』及び白居易の『白氏文集』が無事に経蔵に帰還したことは公開されていなかった。ゆえに、両文集の存在は、斉己や匡白のような一握りの長老しか知らなかったのである。そして、龍徳三年（九二三）

前後、東林寺は再び戦乱に巻き込まれ、そこで両文集を斉己のもとへ移送した方がより安全であると彼らは考えた。斉己と匡白が敢えて時の権力者である高季興と楊澈とに文集の移送を依頼し、両文集の安全を図ったのである。それ故、斉己は大いに力を貸してくれた高季興に、感謝の意を込めて詩を贈ったのである。

更に、斉己は単なる『白氏文集』の保管に最善を尽くしただけでなく、恐らく作品の補綴にも尽力したのではないかと推測できる。斉己は、高氏一族の権勢と財力を利用して、散佚の危機に見舞われていた唐代の有名詩人の詩集の整理に力を入れたことが、次の詩から窺える。

※読賈島集（巻六）：遺編三百首、首首是遺冤
※読李賀歌詩集（巻十）：玄珠與鴻玉、燦燦李賀抱
※読李白集（巻十）：鏘金鏗玉千餘篇、膾呑炙嚼人口傳

斉己が集めた賈島集は、既に三百首以上の作品を数えた。李白集は、千首もの作品数に及んだ。何れも完本に近い数である。また、斉己が会昌の廃仏の乱で焼かれた白居易の肖像にも強い関心を示していたことが、『白蓮集』巻三の「送僧遊龍門香山寺」詩や巻九の「送僧帰洛中」詩から窺い知ることができる。[20]

残念ながら、現存する四部叢刊本『白蓮集』は、実は斉己の全集ではないために、より詳細な『白氏文集』に関する記載を見ることはできない。[21] しかしながら、ここまでの考証によって、李従栄抄本と楊澈抄本とは、斉己が手を加えた東林寺本『白氏文集』と何らかの形で繋がりがあったとみて間違いない。もし本稿の推論が正しければ、北宋刊本が上梓される直前、東林寺本『白氏文集』をめぐって行われた一連の動きは、次のように纏めることができる。

龍徳三年、東林寺に再び戦火が及んだ。そのため、東林寺僧正の匡白と荊南節度使高季興幕下の斉己とが共謀して、寺宝である慧遠の『匡山集』と白居易の『白氏文集』を斉己のもとに移送することを決めた。その後、斉己は、一部散佚した『白氏文集』を補綴し、更に二つの転写本を作った。一本は後唐の秦王李従栄の手を経てかつて白居易の旧居であった普明禅院に奉納。また一本は、徳化王楊澈によって東林寺に奉納された。そして原本は金陵の龍興寺に残った。また、『白氏文集』と一緒に持ち出された慧遠の『匡山集』は、のちに無事

東林寺に返納された。[22]

これによって、現在懸案のままである李従栄抄本と楊澈抄本の祖本をめぐる問題に対して、一つの比較的つじつまの合う解釈が得られたのではないかと考えられる。[23] 龍興年間における宋刊本に近い同一系統本の李従栄抄本と楊澈抄本の出現は、決して偶然ではなかった。既に拙稿「『白氏文集』の成立と廬山―匡白「江州徳化王東林寺白氏文集記」を中心に」[24]にも言及したように、晩年の白居易は、『白氏文集』が「転法輪」になることを切に願っていた。それ故、当時の東林寺の長老の協力を得て三本の転写本を作り、東林寺・聖善寺・南禅院に奉納した。ところが、会昌の法難で、聖善寺と南禅院に奉納した『白氏文集』は、寺院と共にこの世から消滅した。辛うじて消滅の危機を免れた東林寺本も、何らかの事情によって秘匿された。龍興年間、斉己や匡白らの東林寺の長老らが、艱難を乗り越えて新たに三本の寺院本を作り、ようやく世に公開されたのである。

一度は消えかかった白居易の「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、轉爲將來世世讃佛乗之因、轉法輪之**縁**也。(願はくは今生世俗の文字の業、狂言綺語の過を以て、転じて将来世世の讃仏乗の因、転法輪の縁と為さん)」(「香山寺白氏洛中集記」)という本願は、百年後の東林寺の僧侶らのたゆまぬ努力によって、辛うじて持続されたのであった。

注

(1) 白氏文集各刊本の伝承に関する先行研究としては、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(彙文堂 一九六〇年)第一部第一章「刊本の系譜」、平岡武夫「白氏文集の校定 序説」(平岡武夫・今井清校定『白氏文集』京都大学人文科学研究所 一九七一年)、岡村繁「『白氏文集』の旧鈔本と旧刊本」(『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東方学会 一九九七年)、謝思煒「『白氏文集』的伝布及『淆乱』問題辨析」(『白居易集綜論』中国社会科学出版社 一九九七年)などがある。なお、本論文に引用した白居易詩文は、何れも四部叢刊本『白氏文集』を底本とし、適宜諸本を参照した。

（2）『新五代史』秦王李従栄伝に、「秦王李從榮、天成元年、以檢校司徒兼御史大夫、同中書門下平章事。三年、徙鎮河東。長興元年、拜河南尹、兼判六軍諸衛事。……（長興四年十一月）是日、從榮自河南府擁兵千人以出。……從榮夫妻匿牀下、從益殺之。」とある。

（3）岑仲勉「論『白氏長慶集』源流並評東洋本白集」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』第九本　一九四七年、のち『岑仲勉史学論文集』所収　中華書局　一九九〇年）。

（4）本稿に引用する斉己の詩文は四部叢刊本『白蓮集』に拠る。

（5）呉任臣『十国春秋』（除敏霞等点校本　中華書局　一九八三年）巻一百三「斉己伝」、賛寧『宋高僧伝』（范祥雍点校本　中華書局　一九八七年）巻三十「梁江陵府龍興寺斉己伝」、計有功『唐詩紀事』（中華書局　一九六五年）巻七十五「僧斉己」を参照。

（6）管見の限り、専論としての斉己に関する研究は、曹汛「斉己生卒年考証」（『中華文史論叢』総二十七輯［一九八三年第三輯］上海古籍出版社）、陳蒲清「詩僧斉己」（『求索』総第十八期［一九八四年第二号］）、何林天「斉己初探」（『山西師大学報（社会科学版）』一九九二年第二号）、蕭麗華「晩唐詩僧斉己的詩禅世界」（『仏学中心研究年報』第二巻　一九九七年）がある。

（7）岑仲勉「読全唐詩札記」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』第九本　一九四七年）に、「今假定唐荘宗同光年癸未齊己爲八十歳、猶不過生會昌四年甲子。」とある。

（8）前掲注（6）曹汛「斉己生卒年考証」を参照。

（9）例えば『宗統編年』（卍新纂続蔵経　第八十六冊）巻十八に、「（齊）己益陽胡氏子、出家大潙、持律耽吟詠、謁德門發悟。藥嶠石霜、皆參請遍及。後遊荊渚、爲節度高季興留居龍興寺、非其志也。己頸有瘤贅、時號詩囊。愛山水、懶干謁。有未曾將一字、容易謁諸侯之句。與華山隱士鄭谷相酬唱。其後居西山金鼓寂、有白蓮集行世。」とある。

（10）『宋高僧伝』巻三十「梁江陵府龍興寺斉己伝」に、「高氏遂割據一方、探聚四遠名節之士。得齊己之義豐南嶽、以爲築金之始驗也。」とある。

（11）斉己が終始廬山僧団と緊密な連携を取っていることが、『白蓮集』に残る多くの廬山僧侶に送った詩から窺える。

彼は当時の僧正匡白とも深く親交した。『白蓮集』巻七に、「寄懐東林寺匡白監寺」詩がある。詩の本文は次の通り。

「南岳別來無約後、東林歸住有前緣。閒搜好句題紅葉、靜斂霜眉對白蓮。雁塔影分疏檜月、虎溪聲合幾峰泉。修心若似伊耶舍、傳記須添十九賢。」

(12) 斉己「寄廬岳僧」詩に、「一聞飛錫別區中、深入西南瀑布峰。天際雪埋千片石、洞門冰折幾株松。煙霞明媚棲心地、苔蘚縈紆出世蹤。莫問江邊舊居寺、火燒兵劫斷秋鐘。」とある。

(13) 斉己「謝西川可準上人遠寄詩集」詩の全文は以下の通り、「匡社經行外、沃洲禪宴餘。吾師還繼此、後輩復何如。江上傳風雅、靜中時卷舒。堪隨樂天集、共伴白芙蕖。」

(14) 『新五代史』李従栄伝に、「然其爲人經雋而鷹視、頗喜儒、學爲歌詩、多招文學之士、賦詩飲酒。」とある。また『旧五代史』李従栄伝にも、「從榮爲詩、與從事高輩等更相唱和、自謂章句獨步於一時、有詩千餘首、號曰紫府集。」とある。

(15) 斉己「謝高輩先輩寄新唱和集」詩に、「敢謂神仙手、多懷老比丘。編聯來鹿野、酬唱在龍樓。洛浦精靈懾、邙山鬼魅愁。二南風雅道、從此化東周」とある。「龍楼」とは、龍門香山寺の石楼を指す。斉己は、白居易の唱和活動を強く意識しながらこの詩を詠み綴ったことが窺われる。

(16) 斉己「謝秦府推官寄丹台集」詩に、「秦王手筆序丹臺、不錯褒揚最上才。鳳闕幾傳爲匠碩、龍門曾用振風雷。錢郎未竭精華去、元白終存作者來。兩軸蚌胎驪頷耀、枉臨禪室伴寒灰。」とあり、斉己は元白唱和のことを踏まえて詩を詠じている。

(17) 『十国春秋』斉己伝に、「頃之、秦王李從榮召入侍中。秋大宴、齊己窺從榮藏有異志、有『東林莫礙漸高勢、四海正看當路時。』已而脱歸荊南、武信王匿之。」とある。

(18) 前掲注(1)の岡村氏「『白氏文集』の旧鈔本と旧刊本」を参照。

(19) 拙稿「慧萼と蘇州南禅院本『白氏文集』の日本伝来――会昌四年識語を読み解く――」(『白居易研究年報』第九号 勉誠出版 二〇〇八年)を参照。

(20) 斉己「送僧帰洛中」詩に、「赤日彤霞照晚坡、東州道路興如何。蟬離楚柳鳴猶少、葉到嵩雲落漸多。海内自爲閒去

住、關頭誰問舊經過。丁寧與訪春山寺、白樂天眞在也麼。」とあり、また「送僧遊龍門香山寺」詩に、「君到香山寺、探幽莫損神。且尋風雅主、細看樂天眞。」とある。

(21) 現存する四部叢刊本『白蓮集』十巻は、天福三年（九三八）、孫光憲が斉己が病死したという誤報を聞いて、慌てて斉己の弟子西文が所管の斉己詩を集めて編纂したものである。そもそも斉己は自分が亡くなった後の詩集編纂を廖匡図兄弟に託していたようである。斉己「寄賡（廖）匡図兄弟」詩に、「僧外閒吟樂最清、年登八十喪南荊。風騷作者爲商確、道去碧雲爭幾程。」とある。また、顧懐山『補五代史芸文志』（清廣雅書局原刻本）に、「＊詩格一巻　鄭谷僧齊己黄捐同撰　＊僧齊己集十巻　蓮社集一巻　白蓮編外集十巻　案、李調元五代全詩作白蓮集十一巻」という記録が見える。よって、現存する『白蓮集』はそもそも編外集であり、斉己の本集の十巻と蓮社集一巻は散逸したことがわかる。

(22) 四部叢刊本『白蓮集』孫光憲「白蓮集序」に、「余既繕寫、歸於廬岳、附遠大師文集之末。」とある。よって、慧遠の『匡山集』も無事東林寺に帰還したことがわかる。

(23) 李従栄抄本と楊澈抄本の底本は白居易自身が編纂した大集と極めて近い本であることについては、前掲注（1）謝思煒氏論文も同様の見解を示している。

(24) 拙稿「『白氏文集』の成立と廬山―匡白『江州徳化王東林寺白氏文集記』を中心に」（『九州中国学会報』第四十六巻二〇〇八年）を参照。